聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。見せしめのため、他の殉教者とともに左耳をそがれた。

発行日：2013年12月3日／発行者：荒谷　幸二郎／編集者：竹内　光／デザイン：鈴木　博文／題字：山本　廣
イエズス会聖三木図書館
〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/

御旨に従って生きる
―「自分の花を咲かせたい」願い―

ノートルダム清心学園　理事長　渡辺　和子

「鬼」のまま死にたくない

東京・四谷の雙葉高等女学校に通っていた私は、級友から「和子さんは鬼みたい」といわれていました。私は、人を押しのけてでも一番になり、百点を取り、級長になる、というような女の子で、実際その通りになりました。クラスで嫌われっ子になってもかまわず一番を目指したのは、母を喜ばせるためでした。母は、日ごろ「満点をとって来なさい」などと私に努力を求めたからです。

戦争の末期になっていつでも防空壕に飛び込めるようにして寝ている時「鬼みたいな私が死んだらどうなるのだろう?」。「鬼のままでは死にたくない」。「父はあのような死に方をしたのだし」などといろいろ考えました。そのころ東京の女学生にとっても死は身近なものでした。

「敵性国家の宗教はダメ」

雙葉を卒業して聖心女子専門学校に入った十八歳の四月の復活祭後の日でした。空襲警報が発令され電車も走っていないので、荻窪の家から四谷まで歩いて行き、上智大学のロゲンドルフ神父様に洗礼を授けていただきました。空襲の中歩いて帰宅し、洗礼を受けたことを話すと、母はもの凄く怒りました。「キリスト教なんて敵性国家のもの。亡くなったお父様はもちろん、うちは浄土真宗です」。「お父様が生きておられれば、洗礼を許さなかったろうに」と言いました。

受洗後、東京への空襲は激しさを増し、一家で山梨県へ疎開しました。そこにはパリミッションの仏人神父がいて、私は終戦まで甲府のカトリックの幼稚園で働かせてもらいました。

私は一九二七年二月、父が五三歳の時に父の任地の北海道旭川で生まれました。陸軍中将、旭川第七師団長でした。孫のような子供ですから母は産みたくなかったようでしたが、父は逆で、大変誕生を喜んでくれたそうです。私を巡る両親のこの〝落差〟が、私に「産まれてきてすみません」と云う今もって説明するのが難しい劣等感を植え付けました。

目撃した「二・二六事件」

そして運命の一九三六年二月二六日。陸軍将兵三十人余が、陸軍大将、陸軍教育総監になっていた父を荻窪の私邸に襲い、軽機関銃を乱射して殺害しました。父は四十三発の銃弾を受け、九歳になったばかりの愛娘、私の目の前で亡くなりました。「二・二六事件」です。

父は最期に当って、座卓の陰に私を隠し、自らは、敢然と拳銃を三発撃ち返して事切れました。

九年間で一生分の愛情

私は、事件の一部始終、将校が父に止めを刺すのも見ました。母は兵士の乱入阻止に追われて見ていません。姉はすでに嫁いでおり、兄二人は子供部屋に居て見ていません。父が私の出生を強く望んだのは、自分の最期を見届けさせるためだったのかもしれないとさえ思います。

父は「事件」を想定していたのでしょう。寝る時もピストルを枕元に置いていました。家には二名の憲兵が常駐していました。末っ子の私と長くいっしょにいられないとわかっていたからか、たいそう可愛がってくれ、私は九年間に一生分の父の愛情を注いでもらったと思います。

着物姿で修道会に入会

九歳の私は、人は死ぬものだと知りました。また人は、自分が正しいと思えば人を殺す、虐殺する罪を犯すことを父の死から教えられました。父の死は拭い去れませんが、だからといって私が修道会に入ったことと関係はありません。当時入会には三十歳までの年齢制限がありました。私は二九歳七ヶ月で入会するまでに、キャリアウーマンとして仕事をエンジョイし、何度かお見合いもしました。

姉はすでに医師に嫁ぎ、戦後、二人の兄は製鉄会社技師、医師として独立していましたから、母を一人残していくのを除けば、家庭的な気がかりはありませんでした。受洗からの十年余の私の日々を見ていたからか、母と私の間に存在していた〝落差〟を巡るわだかまりは氷解していました。

入会の前夜、母と一緒にお風呂に入りました。私の背中を流してくれながら母は、「結婚だけが女の幸せじゃないからね」と言いました。私は母が準備してくれていた夏物の和服を着て、東京・吉祥寺の修道会の門をくぐりました。

（次頁四段目へ）

シンボルの花・ネモフィラ

淡青色の北米原産の１年草・ネモフィラの花言葉は「ゆるし」。聖三木図書館友の会のシンボルです。４月下旬に咲き始めますが、首都圏では、茨城県ひたちなか市の国営ひたち海浜公園の「みはらしの丘」や立川市の国営昭和記念公園に群生するネモフィラは、息を呑むような素晴らしさです。

亡き母と地元の人の共作 廃校に誕生した「橋本五郎文庫」

読売新聞特別編集委員　橋本　五郎

男鹿半島の東、干拓した湖、八郎潟の辺に位置する秋田県山本郡三種町に「橋本五郎文庫」はあります。私が送った二万冊の本をもとに、廃校になった小学校の校舎を利用して地元の人たちが作った図書館です。オープンしてから二年半、開館日は、水、土、日曜の週三日間ですが、入館者はすでに一万三千人を超えています。

「憩いの森」にならい図書館を

私の町は六年前に三町が一緒になりましたが、今も過疎化は進むばかりです。母校、鯉川小学校は全校で十九人になってしまい、三年前に統合され、百二十五年の幕を閉じました。お盆と正月に帰ったとき、廃校になって荒れるに任せている母校を見るのは忍びないものがあります。何とかしたいと思いました。自分にあるのは本しかない。図書館をつくろうと思いました。亡き母が老人の「憩いの森」をつくったことがずっと頭にありました。

母は男五人、女一人の六人の子どもを育て、三十年間、過疎の、過疎の田舎で独り暮らしをして、十九年前に脳梗塞で倒れているところを発見されて八十一年の生涯を閉じました。その母が「老人憩いの森」をつくりました。持っている山を切り開いて桜の木を植え、ベンチを置いて花見ができるようにしました。その時の私あての手紙にはこうありました。

『道路に立っていると誰かが車に乗せてくれる。野菜が無くなると誰かが家に野菜を持って来てくれる。会う人会う人みな友だちになってくれる。こんなありがたいことはない。そのありがたさに答えるために、還暦を期して自分に何が出来るかを考えた。そして老人の憩いの森をつくろうと思った』。

主婦ら四十人が奉仕して

私には何が出来るだろうか。自分には本しかない。そうだ図書館をつくろう、そうすればお年寄りたちの憩いの場になるかもしれない。そう思いました。私のところは五百人ぐらいしかいない過疎地ですが、委員会を作り、ボランティアを募集したところ、四十人の人が手を挙げてくれました。家庭の主婦、農家の主婦が九割です。図書館について何も知りません。本の分類から勉強し、農作業を明け方済ませて、日中、本を整理しました。すっかり荒れ果てた校舎をきれいにし、二万冊をパソコンに打ち込み、ラベルを貼って、一昨年四月二十九日のオープンにこぎ着けてくれました。

お金がありませんから、ソファーも要らなくなった人からもらい受け、自分たちで縫ったカバーを掛けています。だからとっても温かいのです。いろいろな人が協力してくれました。中曽根康弘元総理は『橋本五郎文庫』の看板を書いてくれました（写真）。建築家の安藤忠雄さんはこれまで出された自著にサインをして送ってくれました。自らが設計した建築物の写真をパネルにして送ってくれました。亡くなった和光の服部禮次郎さんのご遺族からは、福澤諭吉関係の本の寄贈がありました。

生き生きと蘇った過疎の地

何よりもお年寄りが変わりました。外に出てくるようになりました。教養講座、体力教室、グランドゴルフ大会、落語演芸会、劇団の公演…。そしてこの秋「母への手紙」を全国の皆さんに募集する試みもしました。地元の人にとって、経済的な利益があるわけではありません。むしろ持ち出しのほうが多いでしょう。でも間違いなく生き生きとしてきました。

「真の復興は自分の足元から」と私は言い続けてきました。その何よりの証しが『橋本五郎文庫』にあると思います。心から誇りに思っています。

「置かれた所で咲きなさい」

入会すると間もなく、アメリカの東海岸に派遣されました。修道女として一年の修練期を過ごすためでした。その後、学位を取るように命ぜられ、ボストンカレッジで三年間学んで学位をとり、帰国しました。すぐ、岡山県のノートルダム清心女子大学へ赴任を命ぜられました。翌年、二代目学長の急逝を受け、修道会本部から「学長」に任命されました。初めての日本人学長でした。

三十歳半ばの東京育ちの私が慣れない岡山で、しかも大学学長を務めることは、大きな負担でした。四苦八苦していた時、ベルギー人神父が黙って一枚の英詩を渡してくれました。

「置かれた所があなたの居場所。置かれた所で咲きなさい」。

それからの私はいろんな苦労があっても、それらを胸に収めて「お陰様で…」と笑顔で過ごすように努力し、今も自分の花を咲かせたいと願っています。（談）

声　知恵を与えてくれるすばらしい施設

古郡　美はる（さいたま市在住）

ある日、当時勤めていた会社の社長に言われました。「日本のキリシタン文化と殉教者について調べてくれないか?」

その会社に勤める前から、私はデーケン神父様（聖三本図書館元館長）のキリスト教入門講座に出ていて、神父様が聖三木図書館の素晴らしさを強く語っておられるのを聞いていましたが、洗礼を受けるのを躊躇していたように図書館に会費を払ってまで行くのは…とここでも躊躇していました。

でもこの社長の一言、会社の経費で会費を払ったのが聖三本図書館とのお付き合いの始まりでした。その後、震災の影響でその会社は消滅、転職先の会社で、今度は「旧約聖書の植物を調べて下さい」と指示を頂くことになるのです。

受洗後は参加しているイグナチオ教会の講座（デーケン神父様、ガラルダ神父様）や上野毛教会の中川神父様の講座で紹介される言葉や時代背景を知りたくて参考図書を読むために通うようになりました。

日々の仕事、その他で忙殺される中、静かに本を読み、調べ、気分転換したければ黙想しに聖堂へ行ったり…と自由に使える場所と空間が四谷にあるのです。また調べもので困ったときに的確にアドバイスをしてくれる司書の方々の存在も素敵です。

―知恵は世界の果てから果てまでその力を及ぼし、慈しみ深くすべてをつかさどる―（知恵の書8.1）

学生の立場を卒業するとあとは自力で自分を磨くしかなくその基礎体力を図書館は与えてくれます。教会と同じ敷地にある聖三木図書館は私達に知恵を与えてくれる素晴らしい施設ではないかと思います。―慈しみ深くすべてをつかさどる―聖三木図書館はその慈しみの時間も与えてくれます。（ここで時間を過ごされた方なら実感できるはず。）

絶版になっていて手に入らない会誌や本。イタリア語、ラテン語など私にとって未知の世界に向かう扉である様々な辞書類。こんなに素敵な図書館が日々利用できることは私にとって人生の宝です。これからもよろしくお願いします。（ふるこおり・みはる）

サンチャゴ巡礼路を歩いた
―五七歳のリフレッシュ休暇利用―

毎日新聞社会部部長委員　萩尾　信也

勤続三十三年を迎えた今春、「リフレッシュ休暇」を利用して「スペイン巡礼」の旅に出掛けた。リュックを背に歩くこと十日間。体力の衰えを痛感したが、六㌔減となったぜい肉とともに、心身にこびりついたサビまで落ちたような清々しさを感じた。

フランス西部からスペイン北西部のキリスト教聖地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」に至る八百㌔の巡礼路は、世界遺産に登録されて毎年十万を越える人々がやって来る。全踏破には一ヵ月以上を要すが、私は終盤の三百㌔に挑戦した。

格安の巡礼宿に泊まりながら、歩き続ける毎日だった。荷物を欲張ると腰や肩が悲鳴を上げて、距離を稼ぎ過ぎると足のマメや筋肉痛となってはね返る。「自分の身体と心に向き合って、一歩一歩進む。巡礼は人生そのものさ」。巡礼は「五回目」という七十代のフランスの男性の言葉は、巡礼路で幾度も噛みしめることになった。

巡礼者の六割はスペイン人、残りの四割は世界中から来た人々だった。彼らとの交流は多様な価値観との遭遇となった。目的は様々で、熱心な信者もいれば、「自分探し」や「ダイエット」をあげる人々もいた。ロバに幼子と荷物を乗せて「半年がかりで往復する」というフランス人の家族もいれば、「人間関係に疲れた」という四十代の韓国人女性もいた。

上の写真は、大西洋を望む「フィステーラの岬」で撮影した。私を挟んでニュージーランド人のレナイ（四八）とケビン（一八）親子、左端はエストニアの女性教師クリスタル（四〇）。彼らは「巡礼の友」である。

レナイは高校を出て将来を模索中のケビンを誘い、四十日間を掛けて全区間を踏破した。決して上から目線で押しつけることも甘やかすこともせず、胸襟を開いて我が子と正面から向き合う姿勢には学ぶことが多かった。ケビンは、足の痛みに遅れがちな私をいつも視線の隅に入れながら、見守ってくれる心優しい青年だった。

巡礼路を歩きながらケビンをインタビュアーに始まった「自分史語り」は、大切な思い出となった。各自がおもむくままに言葉を紡いだ。「子供も自立し、新たな人生に踏みだそう」と長期休暇を取ってやって来たクリスタルは、冷戦時代から今に至る激動の歴史を淡々と語った。物静かだが芯のある、知的な女性だった。若き日に世界中を旅したレナイの物語には、みんなで引き込まれた。ケビンも初めて聞く逸話もあって、両親の人生に触れる機会になった。

極東の島国・日本からユーラシア大陸西端の海を目指した「五七歳の春のリフレッシュ休暇」。雨の日も吹雪の日も疲労困憊で足が止まりそうになった時も、巡礼路で人々が掛けてくれたエールが、至極の思い出とともに蘇る。「ブエンカミーノ（良い旅を）」。人生はまさに旅である。

【萩尾　信也氏】一九五五年、長崎県生まれ。早稲田大学卒。毎日新聞バンコク支局、東京社会部編集委員等経て現職。新聞連載「生きる者の記録」で「早稲田ジャーナリズム大賞」、同「三陸物語」で「日本記者クラブ賞」を受賞。

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本　2013年12月

老いてこそ遊べ	遠藤周作著	河出書房新社
教皇フランシスコ	エスコバル著	新教出版社
イエスの教えてくれた祈り	マルティーニ著	教友社
禅が教える人生の答え	枡野俊明著	ＰＨＰ研究所
誰も知らないラファエッロ	石鍋真澄ほか著	新潮社
3.11以後とキリスト教	荒井献ほか著	ぷねうま舎
人間にとって成熟とは何か	曽野綾子著	幻冬舎
聖書考古学	長谷川修一著	中央公論新社
まだ見えなくてもあなたの道は必ずある	古木涼子著	青春出版社
トマス・アクィナスにおける人格の存在論	山本芳久著	知泉書館
新約の祈り	教皇ベネディクト十六世著	カトリック中央協議会
『ふしぎなキリスト教』と対話する	来住英俊著	春秋社
神に喜ばれる奉仕　十二人の信仰論	越前喜六編・著	イエズス会管区長室
YOUCATカトリック教会の青年向けカテキズム	日本カトリック司教協議会訳	カトリック中央協議会
武士道とキリスト教	笹森建美著	新潮社
少年口伝隊一九四五	井上ひさし著	講談社

聖三木図書館から

【お知らせ】

◎冬休みの長期貸出について
十二月二十三日（月）～一月五日（日）までのクリスマス休暇及び冬期休館に伴い、十二月二日（月）から長期貸出を始めます。休館中の返却は返却ポストへ。

◎クリスマス関連図書をエレベーター脇のコーナーに集めました。
当館では「クリスマス」関連の書籍は「３８６」番台の「風俗習慣」に分類して棚に置いています。この季節ですから利用する皆様に便利なように降誕節に関した本約一〇〇冊を棚から取り出して、集めてみました。

【友の会からのお願い】

聖三木図書館友の会への新入会および会員継続更新をお願いします。

◎年会費＝一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円

◎入会手続き＝氏名・年齢・住所・学生証明書などの確認書類を図書館受付にご提示ください。

◎年会費は、銀行口座・ゆうちょ口座からの自動払込みをご利用いただけます。

◎年会費お振込先
みずほ銀行四谷支店　普通預金
口座番号　二15848
口座名義　イエズスカイセイミキトショカントモノカイ

＊お名前の後に会員番号をお書きください。

【特別インタビュー】
バチカンで再会した教皇フランシスコを語る

上智大学神学部准教授
イエズス会神学院院長　ホアン・アイダル

ー最近バチカンで、教皇フランシスコにお会いになったそうですが？

アイダル師＝今年創立百周年を迎えた上智大学のバチカン訪問団の一人として九月二五日午前十時からの水曜日恒例の一般謁見で教皇にお会いしました。一般謁見開始に先立って、教皇は九時半から、広いサンピエトロ広場に溢れんばかりの人たちの中を専用車で回って、人々と会話を愉しんでいました。また二十分間の教理説話で、教会の一致を問いかけながらまた一方で「人の悪口を云いそうな時は自分の舌をかむように子供の時に習った。自分はそうしたから、皆さんも」と語って大勢の笑いを誘いました。このような教皇の姿勢は、私が指導を受けていた神学生のころと変わりません。そのあと特別室で上智訪問団に公式に会ってくださいました。

ーその朝、教皇と食事を共にされたとか？

アイダル師＝バチカン訪問の聖職者用宿舎『サンタ・マルタ』にある教皇の部屋で、会議で来ていたアルゼンチンの神父二人と一緒に頂きました。慣例では、教皇が席に着くまで陪席者は立って待つのですが、揃って席に着きました。その間食事のサービスをする奉仕者は居ません。コーヒーなど自分で取りに行きました。教皇の部屋の前には、きれいな制服を着たスイス出身の衛兵が立っているのですが、教皇は、衛兵を椅子に座らせただけでなくお茶とクッキーまであてがっていました。厳格な雰囲気のバチカンで、こうした小さなルール変更も大変なことのようでした。食事は質素でしたが、テーブルにはアルゼンチンの庶民の味ともいえる牛乳と砂糖を練って作るミルクジャムの大瓶がありました。教皇の細やかな心配りに感謝しました。

ー新教皇は選出されたとき「バチカン改革を進める教皇」と言われましたが？

アイダル師＝私は二〇歳の時、修練を終えてブエノスアイレスにあるイエズス会神学院に移り哲学などを五年間勉強しましたが、その神学院長が、ベルグリオ神父（現教皇）でした。若くしてイエズス会のアルゼンチン管区長になりましたが、管区の改革を人事から始めました。人を見る目がありましたし管区の将来への洞察力も優れていました。そのころから彼は自然にシンプルな生活をしながら、イエスと同じように人を大切にする生き方を守っていました。私が日本へ来た一九九一年に彼は司教になりましたが、変わらずに地下鉄に乗り、人に会って話すスタイルを変えませんでした。今度お会いしましたが、無理をして構えるのではなく、七六歳と云う年齢相応に自然体で魅力に溢れていました。この姿勢が、多少時間がかかっても、これまでのバチカンに改革の新しい風を吹き込むと思います。

ー教皇は「三角旗」を持って先生と写真に写っていますが？

アイダル師＝この旗は、教皇の生まれたブエノスアイレス市内のボエド地区を根拠地にするサン・ロレンソと云うサッカーチームのバナーです。アルゼンチンで「ビッグ・ファイブ」に入るチームで、私たち二人とも大ファンです。どなたかが教皇に贈ったのでしょうが、教皇の居間に飾ってあったので話題にすると「これを持って記念撮影をしよう」と言われて廊下に出て撮ったのが、この一枚です。いくら出身地のチームの旗とは云え「三角旗を持った教皇様の写真は初めてだろう」と話題になっているようです。

ーたった一人、教皇が変わっただけで何かが変わり始めている、と言われていますが？

アイダル師＝教え子の私にでさえ昔変わらぬ姿勢のままで、もてなしをして下さる教皇は、『神様は大きなことを考えながらも、小さなことも忘れない』と云う神様のやり方で、この先も教会に希望を与え、改革を進められることでしょう。

（アイダル師はアルゼンチン出身）

キリスト教 関連書籍 出版・販売
聖像・聖品 販売
カトリック世界の多彩な情報満載!
月刊 カトリック生活
1部 210円　年間 3,500円（送料込）
〒160-0004　東京都新宿区四谷1-9-7
TEL. 03-3351-7041　FAX. 03-3351-5430
いつも よいものを——
ドン・ボスコ社
ネットショップ
www.donboscosha.com

インタビュアー・森一弘司教により引き出される、
人生の重みの数々。光と希望の書、待望の書籍化！
人はみな、けなげに生きている
—神は、もがき、悲しみ、苦しむ人とともにいる—
森　一弘 編著
娘の自死
いじめ・不登校
母親の死の責任
修道生活の負担
セクハラ被害
夫の裏切り
介護ストレス
がんの告知
etc…
大好評 重版!!
定価 1,260 円（税込）
〒160-0004　東京都新宿区四谷 1-21-9
Tel. 03-3359-0451　Fax. 03-3351-9534　E-mail: suishin@sanpaolo.or.jp